宮澤賢治論
――身体的語彙から見る賢治の宇宙――

岡屋昭雄

〔抄録〕
宮沢賢治は、身体的危機に直面しつつも、その身体的危機そのものに正対しつつ、解決するために、行（ぎょう）による自己錬磨を自分に課するようになる。中学校時代の仏教的雰囲気（キリスト教をも含めて）から、本格的な行者のような実践をするようになる。

今回は、中学校を卒業し、病気で入院した時代の短歌を中心に意味づけ、価値づけていき、詩、童話等にも言及し、賢治の身体的語彙から作品の宇宙を明確にすることを目的とする。

キーワード　身体的宇宙、身体的語彙、梵我一如、苦悩、宗教的救い

はじめに

賢治は自然と豊かに交流・交感する感応力と、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」（「農民芸術概論綱要」）との強い倫理的意志力が溢れ、賢治の作品宇宙・世界では、木でも石でも動物はいうに及ばず、自然はすべて生あるものとして描かれる。これらすべての生命を殺さずに、みんなが幸せになる方法を常に求めるやさしい眼差しを感じ、賢治自身は他の生命を奪うことなしには生きていけない自らの原罪を責めるのである。したがって、賢治にとっては、社会的弱者と見なされる者への暖かい眼差しが感じられることである。

ところで、賢治十八歳の頃、父親・政次郎との確執があった。つまり、父親・政次郎は、賢治に家業である質屋を継いで欲しいと思い、岩手にある盛岡中学校を卒業すると、上の学校に進学することを望まなかったのである。つまり、家業である質屋の仕事に専念させたかったのである。にもかかわらず、賢治は、家業を継ぐことを嫌がったのである。その原因として様々なことがあるであろうが、賢治の生活歴での特色ある変化に視点を据えると以下のようになる。

十七歳

四月　寄宿舎を追放され、北山曹洞宗の清養院に一級下の小野田究一、佐々木利雄と下宿する。

五月二十一日、北海道の修学旅行に午後十時に、盛岡駅を出発する。函館、小樽、札幌、岩見沢、白老、室蘭、大沼、二十七日、盛岡着。帰盛後、徳玄寺に移る。寄宿舎よりも勉強しやすい為と思われる。が、この頃から父親の意向として上級学校に進学を許さないものと思われ、家業を継ぐことの嫌いな彼は悩む。

八月　北山願教寺で浄土真宗の島地大等氏の法話を聞いて感動している。法話は午前五時から七時までで毎日二三百人の信者があり、「真宗大綱」が講話されたという。

九月　露西亜文学、就中ツルゲネフに耽溺している。このことは、賢治の文体形成にも大きな影響を与える。

十八歳

三月二十三日　盛岡中学校卒業、前年同様成績はよくなく、八十八人中六十番、欠席三十六日、一年の時、百四十三人入学し、六十二人卒業。得意な科目は国語、作文、博物で、三角は丁、体操は丙、操行点も丙である。国語の教師が文才を認めるくらいで、色の生つ白い、ずぼらな、山好き、坊主好きの一風変わった少年と見られて卒業したわけである。

四月　以前から悪かった鼻の手術のために盛岡の岩手病院に入院した。手術後、発熱し、発疹チフスの疑いがあるといわれた。父親・政次郎（四十一歳）は看病していたが自分も発熱し、一ヶ月病床の人となる。賢治の高熱も依然として続くが、ある夜不思議な夢を見る。「まっ白なひげをはやし、白いきものをきた岩手サン（岩手山の山神）がお出になつたす。手にもつた剣でおれは復（腹の間違いか）をうんと刺されたもす」（傍線　筆者）と母に告げた。それから奇態に熱が下がった。

祖父・喜助はもともとのこと、父親・政次郎も商人として家を継がせる考えであつたから、中学を出ればそれ以上の教育は必要ないと考えていた。が、賢治はそうでなかった。同級生の阿部孝・沢田籐一郎は一高、大坪質郎は東京高工を受験していた。学校の志望を捨てるか、家業につくか、その悩みが彼を苦しめた。そして、たびたび父と口論する。病院で賢治は親切な看護婦に初恋の感情を持つ（傍線　筆者）。

六月　退院して家に帰る。以後、店の番をしたり、家で養蚕をしていたので桑つみをしたり、悲しい歌を作ったりした。その頃、農民の質入れした品物の値段ではなく、農民の要求するままにお金を貸したといわれる。

九月　島地大等編『漢和対照妙法華経』（明治書院　一九二八年八月二十八日）が出版された。この本を父の宗教上の指導者、岩手の妙好人といわれる高橋勘太郎から父親・政次郎に送られ、賢治はこれを読む。島地は、北山願教寺の法嗣で、明治四十一（一九〇八）年から毎年八月の一週間、五時から七時まで、朝、仏教講話会を開き、聴講者は三、四百名にもなり、賢治も中学生の頃、それを聞いている。賢治はこの書を読み、わけても、「如来寿量品　第十六」には、身体が震えて止まらなかったという（傍線　筆者）。この頃盛んに和歌を作るのであるが、歌集にはそのことは出て来ない。この少し前の六月十五日の和歌は「東には紫磨金色の薬師仏／そらのやまひにあらはれ給ふ」と、幻覚的な象徴性を帯びた宗教的なものである。「紫磨金色の薬師仏」は、真宗系の仏典には見られない如来であるといわれている。この年の短歌は、百九十首も作り、中学校在学時代全部の百六十六首よりも多いのである。このことからも短歌を日記のようにして記録していたことにもなる。したがって、青春時代にありがちな精神的な動揺の烈しかった時代と把握できるのである。疾風怒涛の時代が、賢治には十七、十八歳に吹き荒れたと断言してもいいと思われる。

また、父との壮絶なる諍いを「ぼろぼろと赤き咽喉してかなしくもまた病む父といさかふことか」との身体語彙「赤き咽喉して」を巧みに用いながらその場の状況を鮮烈に描き出すのである。「ぼろぼろと」との擬声語もその場の状況つまり、身体的にも精神的にもぼろぼろの状況にあることをリアルに感得せしめる機能を有している。

以上のことからも分明の如く、賢治の身体が、その精神と深くつながりがあることが分かるであろう。そして、神秘的な体験も、高熱も依然として続いていたが、ある夜不思議な夢を見て、「まつ白なひげをはやし、白いきものをきた岩手サン（岩手山の山神）がお出になつたす。手にもつた剣でおれのは復をうんと刺されたもす」と母に告げ、それから奇態に熱が下がった、という現象も賢治の身体と心とのありようを示すものである。つまり、精神的な力によって身体が快復する力を抱持していることである。斉藤孝は、『宮沢賢治という身体――生のスタイル論へ――』（世織書房一九九七年二月）に、賢治の精神と身体とのかかわりについて次のような示唆的なことを述べる。

世界は誰にでも同じように見えているというわけではない。賢治は、世界と単純に融和し一体化していたのではなく、むしろ違和を感じていて、世界との新しい関わり方のスタイルを常に模索していた人だと私は思う。しかも賢治の場合は、その模索は、きわめて明晰な方法意識に支えられていたと考える。もちろん、すべてが意識化されて技化（わざか）されていたというわけではないが、賢治には、単なるきっかけや癖をたとえ意識化はしなくとも、世界と強力に関わる技（武器）として錬磨する貪欲さを感じる。換言すれば、自己鍛錬の方法意識自体が技化されているように感じるのである。(二)

つまり、「賢治には、単なるきっかけや癖を、たとえ意識化はしなくとも、世界と強力に関わる技（武器）として錬磨する貪欲さを感じる。」というのである。したがって、自分の身体はまさにミクロコスモスであ

り、マクロコスモスである宇宙・自然と直接に触れる媒体である、というのである。したがって、賢治の身体は、マクロコスモス（前掲の岩手山の山神）に触れ、交感することを通して賢治の身体も精神も治癒したと考えられるのである。森本達雄が「……生涯をつうじて『永遠なるもの』『無限なるもの』を求めつづけたタゴールを、『宗教詩人』と呼ぶのは正しい。けれどもタゴールの宗教は、自ら名づけて言うように『詩人の宗教』であり、『人間の宗教』であった。すなわち彼にとっては、すでに述べたように『永遠なるもの』は超越的な絶対者であると同時に、有限なる世界と人間の魂の内奥にやどる神的なものであった。言うまでもなくこの思想は、人間の本体である自我（アートマン）は宇宙の根本原理である梵（ブラフマン）と一如をなすという、『ウパニシャッド』の『梵我一如』の哲理に源を発するものであるが、タゴールはそれを、若き日のあの精神体験以来、瞑想と体験をとおしてますます深く自らのうちに実感してきたのである。それゆえタゴールにあっては、神を敬い、人間を愛することは、人間を敬い、人間を愛することでなければならなかった。ここにタゴールのヒューマニズムの本領がある。それは、歴史的・社会的・科学的論拠に立つ、いわゆる主義としての人道主義ではなく、すべての人間のうちに聖なるものを認め、それを拝し尊ぶ宗教的行としての人道主義であった。」[二]と述べることにも繋がるのである。つまり、「若き日のあの精神的体験」とは、カルカッタのサッダー街の兄の家のベランダに立って、通りの向こうの葉の茂った樹々の頂に朝日が昇るのを見ていると、「とつぜん、わたしの眼から覆いが落ち去ったような気がした。そしてわたしは、世界があるすばらしい輝きを浴しつつ、美と歓喜の浪が四面に高まってゆくのを見た（傍線　筆者）」、と述べつつ、「全意識をもって」現象の奥にやどる本質的な実在を観はじめたのである。それからというもの、日常のありふれた人や物も、なにひとつ無意味なつまらないものはなく、すべてが、「全存在という大海の一つ一つの波のように思われた」というこの世界のなかで永遠なるものにじかにふれたというよろこびの実感と、時間のなかに永遠が反映しているという確信が、タゴールの終生の信仰となったというのである。したがって、賢治の場合も表面的な現象に埋没することなく、永遠的なものを求める思想・哲学として宗教（仏教を含めて）が賢治の精神の中枢に位置していることになる。したがって、詩人であり、科学者であり、宗教家であることが矛盾することなく共存していたことになる。このことを強調したいのである。

今回は、賢治の短歌、詩、童話を取り上げ、身体的語彙から賢治の宇宙・世界を明らかにすることを目的とする。

以上の賢治の生活記録は編集並発行責任者川原仁左エ門『宮沢賢治とその周辺』（大場印刷　一九七二年五月）を参考にさせて頂いた。

一　賢治の短歌の身体的な語彙から賢治の宇宙を解読する

アーサー・H・スミス（一八四五～一九三二）は、清朝末期に中国に渡ったアメリカの宣教師であり、三十年近く都市や農村に住んでいたという。スミスは、『シナ的性格』という著書を出版している。それに、「中国人は自分で気づいていないが、宿命論者である。かれらがよく口

にする天命は、実質的には運命と同じである。かれらは天を怨まず、運命を呪わない。彼らは貧富に処する道を知っており、富むもこれを楽しみ、貧しきもまた楽しむという、足るを知っているのである。衣食の乏しい庶民までが、われわれには驚異と思われるほどに、泰然としている。中国人の辛抱強さは、外国人に深い感銘をあたえるが、きわめて激しい天災が起こったとき、いたるところでその光景を見ることができる。[三]」と述べる。このことは農耕民族特有の特性であるともいえる。つまり、農業に携わる民族は天候に左右されることが多い。水不足、飢饉、災害等々、人間にはどうすることもできない。したがって、耐えるしかないことを知っているのである。つまり、「無為自然」との感情が醸成されることになるのである。森も「いかなる逆境にもめげず、いつも雑草のような粘り強さで立ちあがる中国民族のもつ秘密は、このような運命随順の人生観にあるといってよい。それは老子の『柔は剛に勝つ』という思想に通ずるものであり、柔構造が剛構造にまさることをしめすものであろう。[四]」と述べつつ、「いつも雑草のような粘り強さで立ちあがる中国民族のもつ秘密は、このような運命随順の人生観にある」と断定することは、同じ農耕民族である、日本人にも通じることである。したがって、東北の農民の苦しみを誰よりも心配した賢治にとっては、その運命随順の人生観を超越する思想の根底には、「農業を芸術に」との思いは大きな希望でもあったであろう。賢治は、『春と修羅』第三集「野の師父」には、「倒れた稲や萱穂の間／白びかりする水をわたって／この雷と雲とのなかに／師父よあなたを訪ねて来れば／あなたは縁に正しく座して／空と原とのけはひをきいてゐられます／日日に日の出と日の入に／小山のやうに草を刈り／冬も手織の麻を着て／七十年が過ぎ去れば／あなたのせなは松よりも円く／あなたの指はかじかまり／あなたの額は雨や日や／あらゆる辛苦の図式を刻み／あなたの瞳は洞よりうつろ／この野とそらのあらゆる相は／あなたのなかに〔複〕本をもち／それらの変化の方向や／その作物への影響は／たとへば風のことばのやうに／あなたののどにつぶやかれます（中略）／古い白麻の洋服を着て／やぶけた絹張の洋傘をもちながら／尚わたくしは／諸仏菩薩の護念によって／あなたが朝ごと誦せられる／かの法華経の寿量の品を／命をもつて守ろうとするものであります／それでは師父よ／何たる天鼓の轟きでせう／何たる光の浄化でせう／わたくしは黙して／あなたに別の礼をばします」（傍線　筆者）と、「野の師父」の運命随順の過酷な姿が描かれる。そして、賢治は、「諸仏菩薩の護念によって／あなたが朝ごと誦せられる／かの法華経の寿量の品を／命をもつて守ろうとするものであります」と、誓いつつ、野の師父に尊敬と感謝の念を捧げるのである。「二千の施肥の設計を終へ」ということからも賢治は農民の為に犠牲的な精神で施肥の設計したものと思われる。ここにも賢治の身体的語彙が有効に機能しているのである。「あなたのなかに〔複〕本をもち」とあることからも分明の如く、農民が如何に自然の影響を深く受けていることが分かるのである。だからこそ「野の師父」といえるのである。

賢治の文学的な出発を短歌と捉えることには誰しも異存がないであろう。筆者が、興味・関心を抱くのは、大正三（一九一四）年の短歌には、賢治の短歌には身体的な語彙が頻出するのである。三月二十三日、

盛岡中学校を卒業し、四月、以前から悪かった鼻の手術の為に盛岡の岩手病院に入院する。手術後、発熱し、発疹チフスの疑いがあるといわれる。父・政次郎（四十一歳）は賢治の看病をしていたが自分も発熱し、一ヶ月病床の人となる。このことが賢治の父親に対する負い目として一生残るようになる。

80　どこまでも検温器のひかる水銀がのぼりゆく時目をつぶれりわれ
85　金色の陽が射し入れどそのひかりふらつく
86　学校の志望はすてぬ木々の青弱りたる目にしみるころかな
88　木々の芽はあまりにも青し薄明のやまひを出でし身にしみとほり
89　われひとりねむられずまよなかの窓にかゝるは赭焦げの月
94　ちばしれるゆみはりの月わが窓にまよなかきたりて口をゆがむる
108　目をつぶりチブスの菌と戦へるわがけなげなる細胞をおもふ
112　すこやかにおうるはしき友よ病みはて、わが眼は黄なり狐に似ずや
114　いつまでかかの神経の水色をかなしむわれにみちくるちから
115　赤きぼろきれは今日ものどにぶらさがりかなしひいさかひを父と又す
117　雲ははや夏型となり熱去りしからだのかるさに桐の花さけり
118　雲かげの山いと暗しわがうれひその山に湧きてそらにひろごる
122　屋根に来ればそらもやみたりうろこ雲薄明穹の発疹チブス
134　わがあたまときどきわれにきちがひのつめたき天を見することあり
147　あたま重きひるはつゝましく錫色の魚の目球を切りひらきたり
156　東には紫磨金色の薬師仏空のやまひにあらはれ給ふ
162　なにの為に物を食ふらんそらは熱病馬はほふられわれは脳病
169　南天の蠍よもしなれ魔物ならば後に血はとれまづ力欲し
170　いささかの奇跡を起す力欲しこの大空に魔はあらざるか

作品番号は、『【新】校本宮澤賢治全集』第一巻短歌・短唱本文篇に従ったものである。つまり、大正三（一九一四）年に集中的に見られる身体的な状況は危機的と断言できるであろう。

「どこまでも検温器のひかる水銀がのぼりゆく時」に「目をつぶれりわれ」と自己の危機的な認識がさりげなく表現されている。誰しも経験することではあるが。85は、金色の陽が射してくると、ふらっとすることがある。そのことを的確に把握する。86は、学校の志望を捨て樹木の青さが目にしみてやりきれない真情を吐露する。木の芽が出たその時、「あまりに青し」と認識したが故に、「薄明のやまひを出でし身にしみとほり」との感情が醸成されたのである。繊細な感情を賢治が抱持していたといえるのである。89は、「われひとりねむられずねむられぬまよなか」という身体的状況に於ける「赭焦げのの月」との認識である。つまり、身体的状況に応じて対象である、自然や風物までも危機的状況に見えて来る所に賢治の特徴があると把握できる。95は、月が「口をゆがむる」というのであり、賢治のミクロコスモスと自然のマクロコスモスが一如であることを示しているのである。91では「われ疾みてかく見るならず弦月よげに恐ろしきながけしきかな」の短歌をあげれば、より説得的であるのだが。108の、「目をつぶりチブス菌と戦へるわがけなげなる細胞をおもふ」の感覚はまさに我々今の人間が忘れてしまっていることである。チブス菌と戦っているけなげなる細胞に迄思いを及ぼしている感情を評価したいのである。112の「病みはて、我が眼は黄なり狐に似

ずや」との自己認識も納得される。その対極にある「すこやかにうるはしき友よ」に対する羨望とも挫折感ともとれる思いが髣髴と浮かび上がってくる。114の自己の見えない内面を豊かに思い描く力はどのように形成されたのであろうか。「いつまでかかの神経の水色をかなしまむわれに」「みちくるちから」といわれる時に、一見矛盾した感情ではあるが、思春期特有の揺れ動く感情であろうか。115は、賢治と父親・政次郎との葛藤を示すものとしてよく紹介される短歌である。「赤きぼろきれは今日ものどにぶらさがり」と自分の身体的状況を明確・克明に示しながら、「かなしきいさかひ」を父親とする、というのであるから何ともやり切れぬ思いがする。「かなしきいさかひ」というのが拡散的に読者に多様に反響する効果を持つのである。117は、身体的な危機的状況を脱出した思いが語られる。「からだのかるさ」との自己認識も納得できる。122の「屋根に来ればそらも疾みたりうろこ雲薄明穹の発疹チブス」も完全に対象へ自己を投影していることが分明である。134は、自分の頭をどうすることもできないやりきれなさを示している。162の「なにの為に物を食ふらんそらは熱病馬はほふられわれは脳病」は、宇宙に存在するすべての物が病的な状況である。「なんの為に物を食ふらん」との問いの重さが詠嘆的ではなく、自覚的な無常観を沸き立たせる効果がある。169 170には、切実な賢治の祈念が込められている。「奇跡を起す力欲し」「まづ力欲し」と熱望する賢治の心象風景はどのようなものであろうか。現実の生活している場所である病院では自分の身体に自信が持てないのである。わけても上級学校への進学を閉ざされた賢治、それに輪を掛けたように鼻の手術、手術後の、発熱から発疹チブスの疑いが出て来たとあれば、肉体的のみならず、精神的にも追い込まれていた筈である。したがって、この時期の慟哭は賢治に様々な思いを掻き立てたと断言してもいいのである。出口の見つからない苦悩を抱え持ちながら、病床にある賢治を対象化すれば、多くのものが見えて来る筈である。

二　賢治の身体的認識を詩的宇宙から覗く

鎌田東二は、宮沢賢治の花崗岩体験を次のように述べる。

大正十一（一九二二）年十一月二十七日、最愛の妹トシが夭折した夜、宮沢賢治は、「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」の三篇の挽歌を慟哭しつつ書き記した。その三篇は、比類のない透明な哀しみと祈りに包まれた作品（と呼べるかどうかわからないが）である。「けふのうちに／とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ／みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ」という詩行で始まる「永訣の朝」には「あめゆき」をとつてきてくれというとし子の生涯最後の願いに応えて、「かけた陶椀」を持ち、「まがつたてつぽうだまのやうに」みぞれの降るなかに飛び出してゆく賢治の姿が描かれている。そして「あめゆき」を取るときの様子が、次のように歌われている。

銀河や太陽　気圏などとよばれたせかいの
そらからおちた雪のさいごのひとわんを……
……ふたきれのみかげせきざいに
みぞれはさびしくたまつてゐる
わたくしはそのうへにあぶなくたち

雪と水とのまつしろな二相系をたもち
すきとほるつめたい雫にみちた
このつややかな松のえだから
わたくしのやさしいいもうとの
さいごのたべものをもらつていかう

死に直面している妹の願いに応えて松の枝から「最後の食物＝あめゆき」を取ろうとする。問題はその場所だ。賢治はそのとき、おそらく家の門柱であろう。「二切れの御影石材」の上にあぶなく立ちあがって、松の枝から「あめゆき」を取る。この「儀式」は、まるで折口信夫がいうところの「恋い＝招魂」の儀礼であるかのようなのだが、その儀式が遂行される場所が「御影石」の上であったことに重ねて注目したい。[四]

つまり、鎌田は、「御影石」は花崗岩から取った石材として土木・建築材料として多く使用される。子どもの頃から「石つこ賢さ」と呼ばれた鉱物少年であった宮沢賢治が知らなかったはずはない、というのである。鉱物の霊的性質を深く理解していたとも述べる。したがって、宮沢賢治が二切れの御影石材の上に危なく立って松の枝からあめゆきを取ろうという行為は、今まさに死に赴むかんとする妹トシへの魂呼びの恋＝招魂儀礼といってもいいのである。「おまへがたべるこのふたわんのゆきに／わたくしはいまこころからいのる／どうかこれが兜率の食に変つて／やがてはおまへとみんなとに／聖い資糧をもたらすことを／わたくしのすべてのさいはいをかけてねがふ」という静かで激しい祈念で歌い閉じられている。

また、賢治の花崗岩体験は、『春と修羅』第二集に収められた「河原坊（山脚の黎明）」（一九二五年八月十一日作）という詩からも明確にうかがうことができる。次にその一部を紹介する。

わたくしは水音から洗はれながら
この伏流の巨きな大理石の転石に寝やう
それはつめたい卓子だ
じつにつめたく斜面になつて稜もある
ほう、月が象嵌されてゐる
せいせい水を吸ひあげる
楢やいたやの梢の上に
匂やかな黄金の円蓋を被つて
しづかに白い下弦の月がかかつてゐる
空がまた何とふしぎな色だらう
（中略）
石の冷たさ
石ではなくて二月の風だ
……半分冷えれば半分からだがみいらになる……
誰か来たな
……半分冷えれば半分からだがみいらになる……
……半分からだが冷えれば半分からだがめくらになる……
……半分冷えれば半分からだがめくらになる……
そこの黒い転石の上に
うす赭いころもをつけて

裸脚四つをそろへて立つひと
なぜ上半身がわたくしの眼に見えないのか
まるで半分雲をかぶつた鶏頭山野やうだ
……あすこには黒い転石で
みんなで石をつむ場所だ……
向ふはだんだん崖になる
あしおとがいま峰の方からおりてくる
ゆふべ途中の林のなかで
たびたび聞いたあの透明な足音だ
なんといふふしぎな念仏のしやうだ
（中略）
まるで突貫するやうだ
もうわたくしを過ぎてゐる
あゝ見える
二人のはだしの逞しい若い坊さんだ
黒い衣の袖を扛げ
黄金で唐草模様をつけた
御輿を一本の棒にぶらさげて
川下の方へかるがるかついで行く
誰かを送つた帰りだな
声が山谷にこだまして
いまや私はやつと自由になつて
眼をひらく
（後略）

つまり、夏の月夜、賢治は大理石の転石に寝るのであり、寝つかれなくて河原を散策し、「平らな石」の上に横たわる。そして誰かが近づいてくるのを感じる。何か呪文めいた文句「半分冷えれば半分みいらになる」との神秘的な体験を通して頭部や声帯部、胸部が熱し、下半身が冷却するのを、賢治は体験する。修験道の霊地早池峰山にもかつて登り、林の中で聞いた透明な足音、「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えている。二人の僧は、念仏を唱えながら賢治の身体を突貫し、通過して行く。おそらく誰かの「霊」を向こうに送った帰りなのだ。ここでは、見えない世界を見ているのであり、つまり、霊視体験である。大理石の上では夢告や神示を得るための場所との認識が賢治にあったことを証しているのである。

ところで、川端康成は、「末期の眼」について次のように述べる。

わたしに『末期の眼』という随筆がありますが、ここでの「末期の眼」といふ言葉は、芥川龍之介（一八九二年――一九二七年）の自殺の遺書から拾ったものでした。その遺書のなかで、殊に私の心を惹いた言葉です。「所謂生活力といふ」「動物力」を「次第に失ってゐるであらう」、

僕の今住んでゐるのは水のやうに透み渡った、病的な神経の世界である。（中略）僕がいつ敢然と自殺出来るかは疑問である。唯自然はかういふ僕にはいつもよりも一層美しい。君は自然の美しいのを愛しかも自殺しようとする僕の矛盾を笑ふであらう。けれども自然の美しいのは、僕の末期の眼に映るからである。（傍線　筆者）[五]

つまり、「自然の美しいのは、僕の末期の眼に映るからである。」はけだし名言である。川端が日本での前衛芸術家の一人の言葉「死にまさる芸術はないとか、死ぬることは生きることだとかは、口癖のやうだったさう」[五]と述べることも説得力がある。つまり、絶えず死と真向かいながら生きていくことが重要である、との認識である。川端が紹介し、その書を所蔵しているという一休の「仏界入り易く、魔界は入り難し。」つまり、「魔界」なくして「仏界」はないともいえるのである。一休が、法語『骸骨』を刊行したのは、康正三（一四五七）年である。一休が正月元旦にしゃりこうべを竹の先につけて、家ごとに「ご用心、ご用心」といったエピソードは「生死事大・無情迅速」の事実を理解させたかったのであろう。うちつづく天災、飢饉、疫病そして人畜の死を目の前にした当時の世相への一つの感慨でもあったのである。だからこそ、一休は人間の背後に骸骨を見ているのである。骸骨の世界から人間を見ている、といってもいいのである。このような眼を賢治も持っていたといってはいい過ぎであろうか。単眼的な思考ではなく、複眼的な思考である。『春と修羅』第一集の「岩手山」は「そらの散乱反射のなかに／古ぼけて黒くゑぐるもの／ひかりの微塵系列の底に／きたなくしろく澱むもの」と、上空からの視点が感じられる「ひかりの微塵系列の底に」には、賢治が彼岸・異界から見ていることになる。恩田逸夫は「『ひしめく微塵』は、乱反射の光、散乱せる反射光、のひとつひとつを動的にとらえた的確な表現であるし、『深みの底に』と『深み』を添えることによって、視点が下方に向けられる印象を強調しているのであ」る、[六]と述べる。つまり、川端のいう「末期の眼」なのである。したがって、自然は「末期の眼」で見るが故に美しいのである。

また「高原」の詩「海だべがど、おら、おもたれば／やつぱり光る山だたぢやい／ホウ／髪毛風吹けば／鹿踊りだぢやい」の世界・宇宙も賢治の身体論を探る有効な材料となる。大正十一（一九二二）年六月二十七日に作られた作品である。海ともまがう光り輝く高原で風に吹かれているのが鹿踊りのたてがみをなびかせている感じだというのである。この「高原」は初題が「叫び」であることも首肯できるであろう。つまり、髪の毛に吹く風から鹿踊りの風景が髣髴と見えるという感性は賢治特有のものであろう。この作品の約二ヶ月後書かれた詩が「原体剣舞連」である。この詩では、天空・天象への関心が強く、光や風や雲などの自然現象についての関心のみならず、自然と人間との一如の世界・宇宙が強調されるのである。

三　童話に於ける賢治の身体的語彙の諸相

賢治の童話作品の特徴として、善玉、悪玉が登場しないことである。これは、賢治の人生観・世界観から招来されているからでもある。「フランドン農学校の豚」では賢治が、人間が動物を無意味に殺して食べる事への異議申し立てである、と捉えることが可能である。私たち人間は、牛の肉や豚の肉を何の罪悪感をも持たずに食べているのである。にもかかわらず、人間の執拗な説得と巧妙な手口に騙されて殺されることになる。人間に殺される場面は、「外では雪に日が照つてゐるのです。

豚はまぶしさに眼を細くしてぐたぐた歩いてゐました。全体どこへ連れて行かれるのか、頭をあげて向ふの方を一寸見やうとしましたらその時豚はピカッといふ強い白光が花火のやうに眼の前にちらばるのを見ました。それからキーンといふ鋭い音ゴーゴーゴーと水の流れる音を聞きました（傍線　筆者）。それからあとは私はもう豚が何と思つたか知りません。とにかくあの畜産の教師が大きな鉄槌を持って息をはあはあ吐き少し顔色青ざめて立ち豚はその足もとにたしかにクンクンと二つだけ鼻を鳴らしたきりぢつとうごかなくなつて倒れてゐたのです。生徒らはもう大活動です。昨日豚の身体を洗つた桶にもう一度湯がくまれ生徒らはみな上着の袖をまくつて待ってゐました。助手が大きな小刀を持つて豚の咽喉を刺しました。風紀上よろしくありませんからあとは詳しく書きません。／とにかく豚は八つに分解されて便宜上雪の中に漬けられたのであります。」と、死の場面が詳細に描写される。「豚はまぶしさに眼を細くしてぐたぐた歩いてゐました。」とその悲しく切ない心情を書き付けるのであり、外の世界が雪の反射で明るいが故に読者への衝撃力が強くなる。「頭をあげて向ふの方を見やうとしましたらその時豚はピカッといふ強い白光が花火のやうに眼の前にちらばるのを見ました。それからキーンといふ鋭い音ゴーゴーゴーゴーと水の流れる音を聞きました。」と豚の死の瞬間を的確に表現する。つまり、立花隆のいう臨死体験が鮮やかに描き出されていることに感嘆させられる。「それからあとは私はもう豚が何と思つたか知りません。」作者（賢治）が顔を覗かせているのである。ここには動物にも人間にも平等の世界があることを主張しているのである。「なめとこ山の熊」の世界も同様である。

また賢治の生前出版した唯一の童話集『注文の多い料理店』の最後にある「鹿踊りのはじまり」では風とも交流できる身体を賢治が抱持していたことを証す。冒頭の文章は、「そのとき西のぎらぎらのちぢれた雲のあひだから、夕陽は赤くなゝめに苔の野原に注ぎ、すすきはみんな白い火のやうにゆれて光りました。わたくしが疲れてそこに睡りますと、ざあざあ吹いてゐた風が、だんだん人のことばにきこえ、やがてそれは、いま北上の山の方や、野原に行われてゐた鹿踊りの、ほんたうの精神を語りました。（傍線　筆者）」と賢治が風とも話のできる特異な才能があったことを示しているのである。この童話の最後は、「それから、さうさう、苔の野原の夕陽の中で、わたくしはこのはなしをすきとほつた秋の風から聞いたのです。」で終わるが、鹿のことばが聞こえたり、鹿の話している「お日さんを／せながさしよへば／くだげで光る／鉄のかんがみ」とか「ぎんがぎがの／すすぎの中さ立ぢあがる／はんの木のすねの／長んがい、かげぼうし。」、あるいは、「ぎんがぎがの／すすぎの底でそつこりと／咲ぐうめばぢの／愛どしおえどし」とまわりながら短く笛のように鳴いて跳ね上がり、激しく激しく動くのである。このことからも分明の如く、自然宗教の世界・宇宙を髣髴と思い描くことができる。また、筆者が四国八十八カ所遍路の旅で経験したご詠歌を聞くような心情になるのをどうすることもできない。まさに「山川草木悉皆成仏」の世界が賢治の理想の世界である、といってもいいのである。賢治の場合、この思想が、東北の農業の営みを真剣・真摯に凝視し、かつ、静謐な思想にまで深化せしめた結果である、と把握できるのである。東洋思想、わけても農耕民族は、自然によって起こされる飢饉や災

害に対して、諦念の思想を育んだといわれている。自然は輪廻転生の思想を生み出したのであり、つまり、木や石のような無生物にも、あるいは、動物に対しても人間と同様に接する態度や思想が醸成されたと考えるのが至当であろう。

おわりに

心身二元論から心身一元論への世界が、今切実に求められている。賢治の感覚の鋭敏さは彼の生き方ともかかわって論究されなければならないという思いを強烈に抱くのである。その結節点として大正三（一九一四）年は賢治の生き方（どう生きるのかとの苦悩）の重要な課題を背負っていたと把握できるのである。それを主要には短歌を通して追究することができた。今後とも賢治の全作品を博捜しつつ、身体的語彙を検討しつつ、賢治の賢治の作品の世界・宇宙を明確にしたいものと考えているところである。

注

（一）斉藤孝『宮沢賢治という身体――生のスタイル論へ――』（世織書房　一九九七年二月）六頁たとえば、本論では地水火風の想像力に関連して出てくる、固いものを研ぎ合わせるとか、世界をかすませるとか、燃焼しながら上昇するとか、まっすぐにすっきりと立つとか、風の中を歩くとか、という諸々の技は、現実の次元での身体的行為と象徴的な次元でのイマージュ（イメージ）が渾然一体となった動きである、と述べていることも賢治の身体と心（精神性、あるいは宗教的な宇宙）を解読・解釈する場合には有効である。

（二）『タゴール著作集　第一集　詩集一』（第三文明社　一九八一年五月）の解題の六一四頁に述べられたものである。

（三）森　三樹三郎『老子・荘子』（講談社　一九九四年十二月）九十～九十一頁

（四）鎌田東二『聖なる場所の記憶――日本という身体――』（講談社　一九九六年二月）一九二～一九四頁

（五）『美しい日本の私』（講談社　一九六九年三月）十六～十七頁

（六）恩田逸夫『宮沢賢治論　2　詩研究』（東京書籍　一九九一年五月）六十八頁

（おかや　あきお　教育学科）

（一九九七年十月十六日受理）